

フィラデルフィア教会は、スミルナ教会と並んでイエス・キリストから一切の叱責を受けず、純粋な称賛と励ましだけを受けた例外的な教会。

フィラデルフィア(Φιλαδελφεία は、**φίλος**《フィロス、愛、友愛》と **ἀδελφός**《アデルフォス、兄弟》を意味する言葉の合成語。現在のトルコ・アラシェヒル)は、「兄弟愛」を意味する名を持つ都市で、アジアとフリギア(付録の「聖書地図8参照」を結ぶ交通の要衝に位置し、「東方への関所」と呼ばれていた。

最新の歴史・考古学研究によると、この地域は激しい「火山帯・地震地帯」であったようである。紀元17年の大地震で町は完全に壊滅し、その後も長期間にわたり余震が続いたそうである。そこで住民たちは家屋が倒壊する恐怖から市街地に住むことを避け、郊外の丘陵地帯やテントで野宿生活を送っていた。この「いつ足元が崩れるかわからない」「常に外へ逃げ出さなければならない」という慢性的な恐怖と不安定な生活環境が、12節の「神殿の柱」「もう決して外へ出ることはない」というイエス・キリストの約束を理解するための重要な鍵となる。

7節。

「フィラデルフィアにある教会の天使にこう書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持つ方、この方が開けると、だれも閉じることなく、閉じると、だれも開けることがない。その方が次のように言われる。』」

ここではイエス・キリストを「聖なる方、真実な方」と呼び、旧約聖書において神にのみ帰せられる属性を身に帯びておられる方として紹介する。さらに「ダビデの鍵」を持つと宣言する。これはイザヤ書22章22節の引喩であり、ダビデ家の全財産と宝物庫を管理する絶対的な権威を与えられた「ヒルキヤノ子エリアキム」の姿をキリストに重ねたもの。

当時、フィラデルフィアのキリスト者たちは、現地の巨大なユダヤ教の会堂(シナゴーグ)から異端として追放され、「お前たちは神の国(救い)から締め出された」と宣告されていた。その彼らにイエス・キリストは、「ユダヤ教の指導者たちではなく、ダビデの真の末裔である私こそが、神の国への入場を決定する絶対的な鍵(権威)を握っているのだ」と宣言し、彼らを安心させている。

8節。

「わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に門を開いておいた。だれもこれを閉めることはできない。あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないと言わなかった。」

学者たちは、この「開かれた門」について二つの意味を指摘する。一つはパウロがよく用いた「福音伝道の機会」としての開かれた門。もう一つは、黙示録の文脈においてはより深く「終末における神の国・救いへの確実な入場」の意味。イエス・キリストが開いた救いの扉は、ローマ帝国や迫害するユダヤ人(ユダヤ教)がどれほど力を持っていても、決して閉ざすことはできない。

また、主イエスは彼らの状態を「力が弱かった(μικρὰν ἔχεις δύναμιν、ミクラン・エツケイス・デュナミン。直訳:少しばかりの力を持っている)」と表現する。これは彼らが数的に少なく、社会的な影響力も財力も乏しい、取るに足らない集団であったことを示している。主は、その「少しの力」を限界まで用いて御言葉を守り抜いた彼らの忠誠心を、最大の称賛をもって評価された。

9節。

「見よ、サタンの集いに属して、自分はユダヤ人であると言う者たちには、こうしよう。実は、彼らはユダヤ人ではなく、偽っているのだ。見よ、彼らがあなたの足もとに来てひれ伏すようにし、わたしがあなたを愛していることを彼らに知らせよう。」

迫害を行っていた現地のユダヤ人たちを、主は「サタンの集い(シナゴグ)」と厳しく呼ぶ。イザヤ書(43章4節、60章14、15節)には、終わりの日に異邦人がイスラエルの足元にひれ伏すという預言があるが、イエス・キリストはその立場を完全に逆転させる。血統的なユダヤ人ではなく、イエス・キリストを信じる教会こそが「真のイスラエル」であり、迫害者たちが最終的に教会の足元にひれ伏し、イエス・キリストの愛がどこにあるかを思い知らされる日が来ると約束されたのである。

10節。

「あなたは忍耐についてのわたしの言葉を守った。それゆえ、地上に住む人々を試すため全世界に来ようとしている試練の時に、わたしもあなたを守ろう。」

「守ろう(τηρήσω ἐκ、テレソー・エキ)」という表現は、ヨハネによる福音書17章15節(「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださいることです。」)と全く同じ用法す。物理的にこの世界から取り去って苦難を免除するのではなく、全世界を覆うような激しい迫害や患難の「ただ中」にあっても、彼らの信仰が失われず、棄教から霊的に完全に「保護される」という約束。

11-12節。

「わたしは、すぐに来る。あなたの栄冠をだれにも奪われないように、持っているものを固く守りなさい。勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。わたしはその者の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都、すなわち、神のもとから出て天から下って来る新しいエルサレムの名、そして、わたしの新しい名を書き記そう。」

「わたしはすぐに来る。」(ἐρχομαι ταχύ、エルコマイ・タキー、わたしは速やかに来る)。原語(ταχύ)は、時間的に「すぐ」という意味もあるが、黙示録では「時が来れば遅れず、決定的に」という響きもある。

「持っているものを固く守りなさい」。命令形で、「握り続けよ」「手放すな」という意味。ここで守るべきものは、信仰、御言葉、イエス・キリストの名への忠実さ。神が守ってくださるからこそ、人間の側にも「守れ」という勧めが本気で語られている。神の主権と人間の責任は対立しない。神の恵みが、信仰者の忍耐を生み出すのである。

「わたしの神の神殿の柱にしよう」。黙示録21章22節には「全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。」とある。つまり、父なる神と「小羊」すなわちイエス・キリストという神殿の柱とされる。イエス・キリストの体の一部となるということ。

前述の通り、大地震のトラウマにより「いつ家が崩れて外に逃げ出さなければならぬか」と怯えていたフィラデルフィアの人々にとって、この言葉はどれほど大きな慰めであったらうか。天のエルサレムにおいて、彼らは絶対に倒壊することのない神の「神殿の柱」として固定され、二度と恐怖のゆえに「外へ出る」必要はないという、永遠の安定の約束である。

さらに、彼らには「神の名」「新しいエルサレムの名」「キリストの新しい名」が書き記されます。古代において柱に名が刻まれることは所有と名誉の象徴であり、彼らが永遠に三位一体なる神の所有として愛され、守り抜かれるという究極の保証が宣言されている。

13節。

「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。」

「耳を持つ者は聞け」という言葉。「聞く」(ἀκουσάτω、アクサトー)は、ただ音として聞くのではなく、信仰をもって受け取り、従うこと。「諸教会に」と複数形。つまりこれはフィラデルフィア教会だけでなく、すべての時代の教会への主イエスの言葉である。

フィラデルフィア教会の姿は、数も少なく社会的影響力も乏しい現代の教会の歩みと重なる。私たちが生きる社会においても、教会はしばしば「力が弱い」無力な存在に見える。華やかなプログラムや、社会を動かすような政治的影響力もなく、世の中からは時代遅れの少数派として見下されることがあるかもしれない。また、フィラデルフィアの住民のように、経済的・社会的な「地震(不安定さ)」に怯えながら生きている人も少なくない。

しかし、主イエスが私たちに求めておられるのは、社会的な強さや成功ではない。「力が弱く」ても、イエス・キリストの言葉を誠実に守り、日常の小さな試練の中でその名を否まない「忠実さ」である。私たちが自分の弱さを認め、ただ主の恵みだけにすがるとき、そこにイエス・キリストの絶対的な力が働く。

私たちが頼るべきは、人間の造った一時的な組織や財力ではなく、「ダビデの鍵」を持つイエス・キリストご自身である。主イエスが開かれた救いと伝道の扉は、どんな権力者にも、時代にも、そしてサタンにも閉じることはできない。この世でどれほど弱く小さく見えようとも、最後まで信仰を貫く「勝利者」は、決して崩れることのない天の神殿の柱とされ、神の永遠の愛の所有とされる。

フィラデルフィアにある教会に宛てられた主イエスの言葉は、小さな教会、弱さを覚える教会、社会的には目立たない教会にとって、本当に大きな慰めである。主イエスは「力が弱い」のを軽んじない。むしろ、その弱い力で御言葉を守る教会を、終わりの日まで支えてくださる。